

放送大学大学院文化科学研究科

人間発達科学プログラム

1. プログラムの人材養成目的

- 現代社会は人間の発達に様々な課題を要請しているとともに発達上の困難や問題も生起させています。人間発達科学プログラムは、心理と教育に関する科学的・実証的な調査研究の方法と専門的知見を有し、家庭、教育機関、地域社会等の諸分野で実践的に活動できる指導的人材の養成を目的とします。

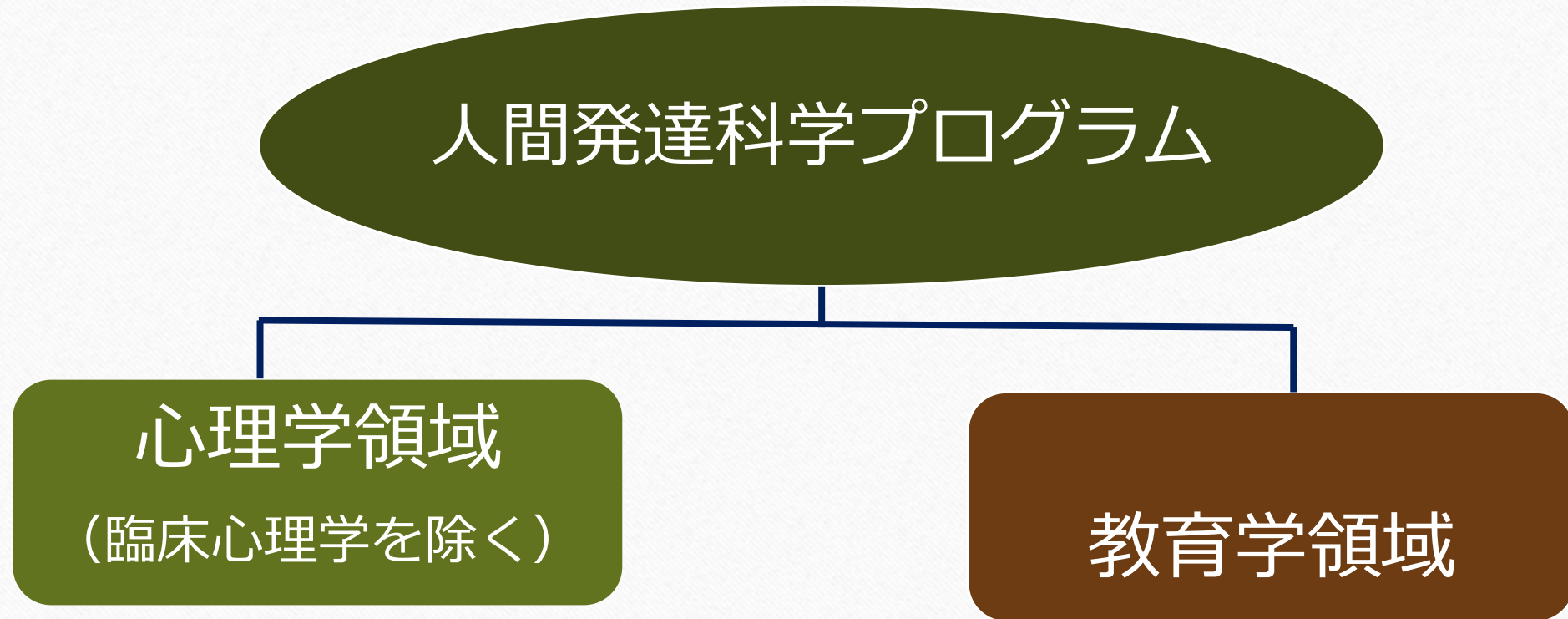
2. 求める学生像

☆ 人間発達の心理的・教育的な問題に強い課題意識と学習意欲を有する人

☆ 上記の問題を科学的・実証的に考え分析して課題に積極的に取り組みようとする熱意のある人

3. プログラムの特徴

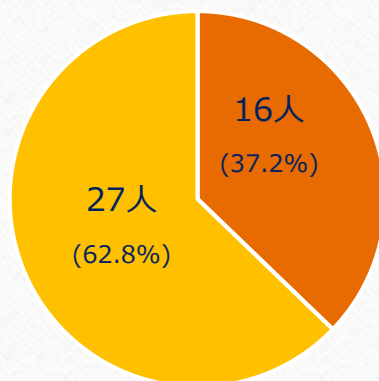
(1) 人間発達科学プログラムを構成する2領域



(2) 学生の属性 (2023年3月修了生)

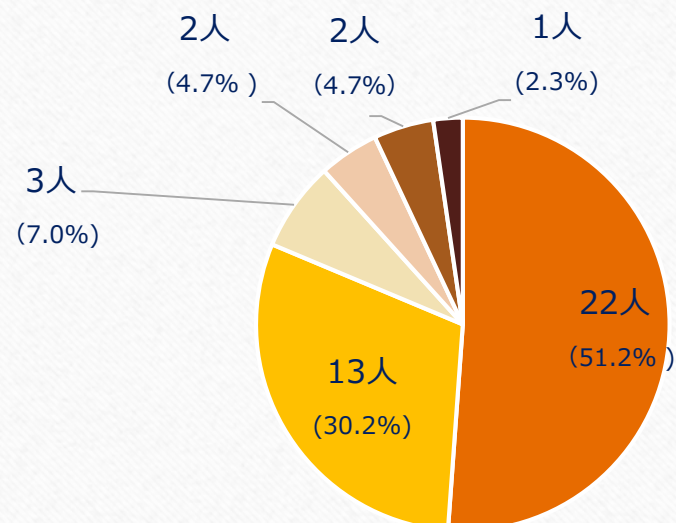
N=43人

男女別



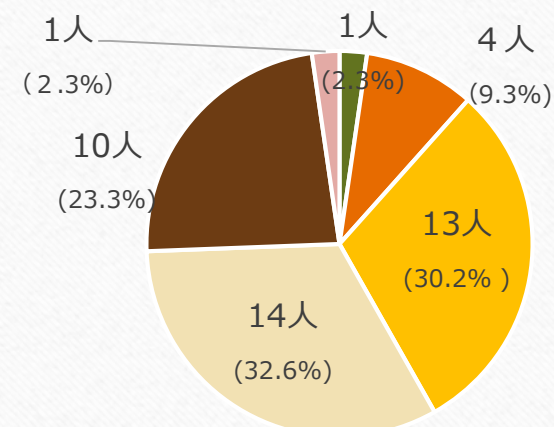
■ 女性 ■ 男性

職業別



■ 教員 ■ 公務員・団体職員等 ■ 会社員等
■ 定年等退職者 ■ 看護師等 ■ 自営業・自由業

年齢別



■ 20代 ■ 30代 ■ 40代 ■ 50代 ■ 60代 ■ 70代

(3) 研究指導担当教員 (専任教員のみ)

心理学分野の教員



進藤聡彦 (教育心理学)



高橋秀明 (認知心理学)



向田久美子 (発達心理学・文化心理学)



森津太子 (社会心理学)

教育学分野の教員



岩崎久美子（成人教育学・生涯学習論）



櫻井直輝（教育政策・教育行財政学）



苑復傑（比較教育・遠隔高等教育）



橋本鉦市（高等教育論・教育社会学）

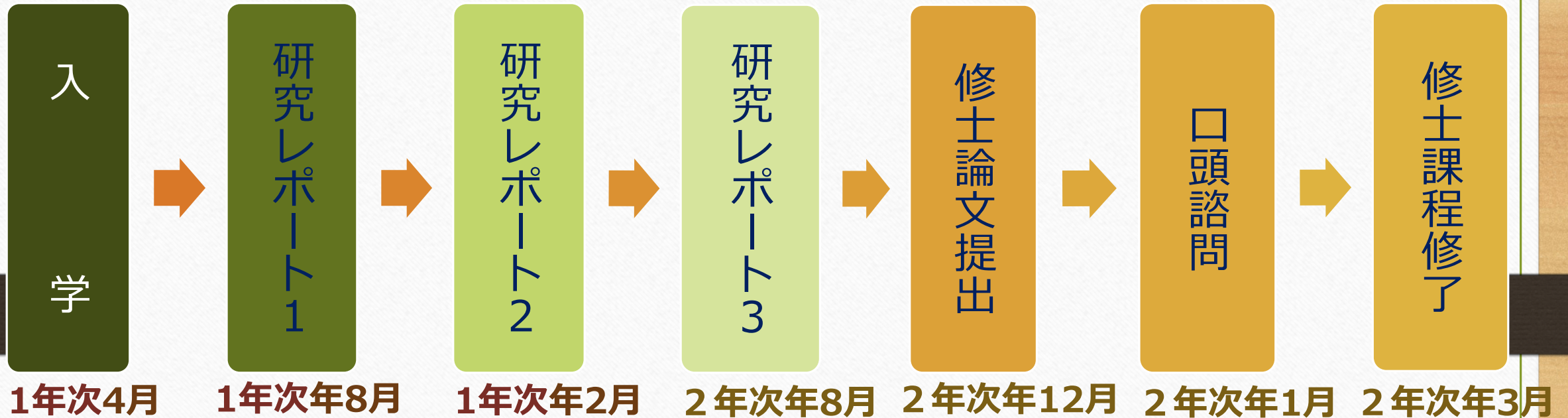
4. プログラム指導法の特徴

(1) 指導方法

☆一般に、月一回程度、千葉（幕張）の大学本部、または東京文京学習センターなどで対面のゼミ形式の指導

☆遠隔地に居住で、毎回は来られないという方には、E-mailやWEB会議システムなどを使っての指導

(2) 修士課程の修学の流れ



指導教員による研究指導

授業科目の履修

(3) 研究レポートとは

☆研究レポートは修士論文の完成までのプロセスで、研究の進捗状況の報告で、修士論文の完成までの小目標といった性質のもの

例えば

研究レポート1で自身の研究テーマに関する先行研究のまとめと実験や調査の立案まで

研究レポート2で実験や調査を実施し、その結果の集計まで
研究レポート3で結果の分析まで

(4) 過去の修士論文のタイトル例

領域	論文タイトル例
心理	対人関係能力の育成を図るSSTプログラムの開発と検証 – 自己統制の3要素（認知・行動・情動）に着目して –
	小学校国語科における論理的文章を「書くこと」の指導実践研究
	存在論的脅威が人生の意味に及ぼす影響 – 一般化可能性と再現性の検討 –
教育	離婚後の面会交流を親子はどのように体験しているか – 子どもの感情及び父母の認識・関わりの観点に基づく質的研究 –
	教育未来創造会議「第一次提言」で示された「ライフイベントに応じた柔軟な返還（出世払い）の創設」は妥当か？
	SDを教職協働と大学運営の改善に結びつける方策 – 国立大学の状況を基にした考察 –
	職業能力開発総合大学校におけるヒューマンスキルの育成 – 経験学習モデルに基づく一般教育科目「自主企画実践」履修生の分析から –
	自分の思いや考えを伝え合う力を高める中学校国語科の学習指導の開発
	高等学校におけるメンター制度の研究 – 京都市立A高校での運用を中心に –

(5) 修了生からのアドバイス

☆ゼミに参加して、他の方の研究についても質問することも勉強になりますし、自身の研究に関しても様々な意見を求めることが重要だと思います。そうすることで視野も広がり、行き詰まった時にも大きなブレイクスルー（突破口）を発見することができるかと思います。

☆実験調査の対象や実験協力者に可能な限り早めにアポイントメントを取ることです。これに調査準備も合わせるとかなり労力を要します。量的な分析をしようとする、調査対象の人数の十分な確保も必要になると思いますので、これに早めに取り組むか否かで、その後の分析に使える時間も大幅に変わると思います。

☆ 1年目にできるだけ、科目で必要な単位をそろえておいて、なるべくなら2年目は、修士論文のデータ分析や執筆に時間を集中的に充てられるよう調整すると思います。

☆ 修士論文を書くために必要となる技能や知識を、卒業に必要な単位として必要な授業で習得すれば一石二鳥になります。（私の場合、統計分析に関わる知識や技能が苦手・不足と自覚していたので、1年目の授業で積極的にこの分野を選択して習得しました）

☆ ゼミには積極的に出席して報告する。（私の場合、ゼミで報告する内容に自信があったわけでは、全然ありません。しかし、ゼミの日程が決まっているので、その時までにまとめたことや今やっていることを報告するようにしました。そうでないと、一人では絶対に論文の調査も分析も進んでいかなかったはずです。ゼミに出られない時も、この1か月はこのようなことをしました、とメールで報告するように心がけました。こんなふうにゼミという区切りがあったので、少しずつ進んで来られました。）

☆いろいろな論文を読むと、段々、具体的な方針が見えてきます。

☆他の人の異なるテーマの話題にも積極的に参加すること。意外なところに共通の課題が見えてきます。

☆はっきり言って、仕事に忙殺されてしまい、正直なところ何度もくじけそうになりました。担当の先生は勿論ですが、同じゼミの方々との繋がりもととても大切です。人間は一人では弱いので、同じゼミ生の頑張りや励ましが、自分を引っ張っていつてくれたとも思うからです。

☆ゼミを一つの目安として研究を進めることがモチベーションの維持や進捗具合に大きな影響を及ぼすと思います。

(修了者からの寄稿)

人間発達科学プログラムの紹介は以上です。
皆さまに来年の4月にお目にかかるのを楽しみにしています。